

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520473

研究課題名（和文）言語生活 50 年の変容—大分県方言談話資料を比較して—

研究課題名（英文）50 yeares change of Ethnography of speech—Compare discourse in Oita Prefecture—

研究代表者

杉村 孝夫（SUGIMURA TAKAO）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60083234

研究成果の概要（和文）：50 年前 20 年前の大分県方言談話資料（1 次 2 次とも実施したのは 24 地点）に加え、本研究では大分県内 13 地点の談話を収録した。それらは、少年層・青年層・高年層の 3 世代の男女 1 組の最大 8 つの場面設定の会話と自由会話からなる。50 年間を通して同じ年代設定、同じ場面設定の談話を 3 回収録したことになる。これらの談話資料を比較し、文末助詞の抑揚と機能、辞去の場面の分析など 50 年間にわたる言語生活の変容を解明した。

研究成果の概要（英文）：Compare 50 and 20 years ago discourse archive of Oita prefecture Dialect and collected in this research 13 places articles in Oita prefectue,we researched the change of particles and analysed the scene of leave-taking and others.We reseached 50 yeares change of Ethnography of speech.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語生活・言語変容・大分県方言・談話分析・文末詞・方言談話資料

## 1. 研究開始当初の背景

全国的レベルでの方言談話資料の収集・保存が 1960 年代の NHK を嚆矢として、その後国立国語研究所、文化庁等によって推進されてきた。

大分県では NHK 大分放送局と大分大学の共同になる大分県方言の談話資料の、放送、出版が、第 1 次、1954-59 年に県内と隣接県の合計 32 箇所の収録・調査が行われ、NHK 大分放送局のラジオ番組「大分県方言の旅」として 83 回にわたり放送された。その後 30 年経った 1983-86 年第 2 次の 24 地点の

収録と放送が行われた。この 2 度にわたる「大分県方言の旅」で収録した録音を文字化し、カセットテープ 8 本を付して刊行したものが松田正義・糸井寛一・日高貢一郎『方言生活 30 年の変容』（1993）であり、30 年間の言語生活の変容を解明する資料が公刊された。また、分析篇である『大分県方言 30 年の変容』（1996）によって 30 年間の変容が明らかにされた。

これらの資料、先行研究を背景に、この言語生活の変容に関する研究を継続発展させることが背景にあった。

## 2. 研究の目的

1954-59年及び1983-86年の2次にわたる均質かつ良質な大分県方言の談話資料と、2009-2011年の本研究で収集する談話資料を比較して言語生活を対象とした50年間の変容を解明する。これにより、言語生活の変容に関する一般法則を導き出すことが本研究の目的である。

経年的に50年間の3次にわたる談話資料が比較できるのは大分県においては他にない。

言語の要素である語彙、文法、表現などの変容とともに「朝、近所の家を訪ね、ものを借りる、或いは何かを伝える」とか「道でばったり近所の知り合いに出会って立ち話をする」また、祝儀・不祝儀の挨拶をするなど、日常の生活で遭遇する場面で交わされる談話の全体を比較し言語生活としての変容を探る。自由会話では収録の年代や話し手の年齢にとって身近な話題を自由に考えて貰い自由に話してもらう。それはいつのどの年代には何が関心事なのかを反映しており、これこそ「言語生活」を対象とした50年の変容の解明につながると考えられる。

## 3. 研究の方法

1次・2次の収録が行われたのと同じ地点の大分県内12の地点において1次・2次と同様の場面設定の会話及び自由会話を、高年層・青年層・小年層年の男女1組、計6名3組について収録する。

設定する場面は「朝、近所の家を訪ねる」「夜、近所の家を辞する」「道で近所の知り合いに会う」「店で買い物をする」(少年層はここまで)「旅行に出かける夫を見送る」「旅行から帰った夫を迎える」(青年層はここまで)「祝いごと」「悔やみごと」(高年層は以上すべての場面)の8場面である。

大分県内は6つの方言区画に分けられる。中部、そして東部はさらに北部と南部、西部、南部、北部の6区画である。50年前、20年前の談話資料が揃っている地点を各区画から2箇所以上選択し臨地して収録する。話者は1地点につき年代・性別を組み合わせた3世代6名について収録する。こうして得られた談話の音声を、カタカナで忠実に文字化し、共通語訳、注記を施し諸視点からの分析に耐えうるコーパスを作製する。これを50年前・20年前の同様の資料と比較し経年的に言語変容の実態を解明する。

## 4. 研究成果

大分県方言でよく使われる文末の助詞「デ(一)」の音調・機能を談話資料と聞き取り調査により解明した。「デ(一)」はやや高いあるいは高い待遇度を持つ文末の助詞である。意味は<告知>が中心である。場合によ

っては<問いかけ>や<あいづち>にもなる。<疑問>の場合は軽く短く、<断定>の場合は長く強く発音する。上昇調の「デ(一)」は共通語の「よ」相当、下降調の場合は「か」相当である。

また、収録した8つの場面のうち辞去の場面の談話分析をおこなった。辞去の場面のテキストレベルから談話機能単位を抽出し、その単位の連鎖の世代差、経年的比較を行った。談話機能単位の異なり数の平均を世代間で比較すると、高年層と青年層の間より、青年層と少年層の間に大きな差があることがわかった。

(表1)

談話機能単位の異なり数、延べ数の平均を世代で比較すると次の通り。

異なり数の平均	延べ数の平均	
高年層	7	13.58
青年層	6.42	11.58
少年層	5	7.5

高年層・青年層では辞去の基本連鎖パターン「辞去の理由→辞去の表明→引き留め→別れの挨拶」に訪問への謝辞や再来の提案などのオプションを加えたうえで辞去の最終段階へと進んでいく。少年層では談話機能単位の種類も少なく、繰り返しも少ないという特徴が見られる。その結果異なり数の平均の差が大きくなる。収録年代の違いより世代の差が大きいことがわかった(表1参照)。

具体的な談話機能単位、そのバリエーション内容、テキストレベルのキーワードを竹田市の3世代について示す(表2参照)。

(表2)

2009年長湯 高年層(男性79歳・女性84歳)

談話機能単位 談話機能単位の内容 テキストのキーワード(テキストレベル)の順で示す。

m辞去の理由 1 時が経った トキガ タツタキ

／辞去の理由 2 家族が心配する バーサンモキニシチョロト オモーキ

／辞去の表明 1 帰るよ カエルデ

f 引き留め まだよい マダ イージャーネーナ

m辞去の理由 1 時間が長くなった ジカンモナゴナツタキ

(繰り返し)

／訪問への謝辞 御馳走になった ゴッソーニナツタ

／辞去の表明 2 帰らせてもらう カエラシチモラウキナー

f 待遇の詫び 1 何もかまわなかった ナンモカマワンジ ワルカツタ

m謝辞 有り難う オーキニ

／別れの挨拶 さようなら サイナラ

f 待遇の詫び 2 待遇が不十分だった オンシヤク ワルーゴザイマシタ  
／再来の提案 また来てくれ マタ キチョクレ

(注) 1 発話中に複数の談話機能単位が現れる場合(斜線)／で区切って示す。談話機能単位は1つで1発話とは限らない。上の例で言えば、「辞去の理由」を述べた後、続いて「辞去の表明」をしたり、「待遇の詫び」を述べた後、「再来の提案」をしたりが、1発話中で行われる。談話機能単位という観点からは1発話が複数の機能単位の連続からなることもよくある。

・談話機能単位がテキストレベルで同じ場合、同じ番号とし、(繰り返し)などと注記する。番号が1・2・3などと異なる場合は、談話機能としては同じだが、「内容」が異なる。「辞去の理由」については、おおむね、番号が多くなるにつれて深まっていく。

2009 年長湯 青年層(男性 33 歳・女性 33 歳)

m辞去の理由 1 遅くなった オソナツタナー  
／辞去の表明 1 帰ろうかな ソロソロ カエローカー

f 応答 モー カエルンナ

m辞去の理由 2 朝から草刈の手伝いがある アサカラ クサカリオ テツダエチ イワレチョルケン

f 引き留めの理由 1 まだ早い マダ ジューイチジジャ

f 引き留め 2 遊びの続きを提案 モーチョット ゲームショーエ

m辞去の理由 3 腹も減った ハラモ ヘツタシ

／辞去の表明 帰らなければいけない カエラント ワリーワ

f 再来の提案 ではまた(おいで) ジャーマター

／帰途の注意 気をつけて帰れ キオツケテカエツテナ↑

／引き留めの理由 2 まだ(店が)開いている ニジマデ アイチョル

代行タクシーもある ダイコーモ ダイジョーブ

m辞去の理由 2 草刈りだから クサカリヤケン

／辞去の表明 2 帰った方がいい ソロソロカエッタホーガ ヨカロー

f 引き留め 2 もう一杯飲んで帰らないか コレダケ ノンデ カエラン?

m応答 マー ジャ

f 引き留めの理由 3 皆が集まっているから セッカク ミンナ アツマッチョンケン

／引き留め 3 これだけ飲んで帰れ コンダケジ ノンデ カエレバ エー

(健康についての話題)

m訪問への謝辞 1 (食べ物) うまかった オイシカッタ

／辞去の表明 3 帰る ジャー ソロソロ カエルケン

f 帰途の注意 気をつけて帰れ キオツケテカエツテナ

m応答 ハイハイ

f 訪問への謝辞 2 有り難う アリガトー

m応答 ハーイ

f 別れの挨拶 では ジャーネ

m応答 ハイ

f 応答 ハイ

(注) 「応答」としたものは直前の発話への応答で「辞去の場面」にかかわる談話機能単位としては直接働いていない。

2009 年長湯 少年層(男性 13 歳・女性 14 歳)

m辞去のきっかけ 今、何時? イマ ナンジクライ

f 応答 モー ロクジ

m辞去の理由 1 時間がたつのは早い ハヤクネ↑

f 引き留め 1 未だ大丈夫 マダ ダイジョーブヤロ

m辞去の理由 2 家族から帰るよう指示 ロクジニャー カイレッチ オヤニ イワレタニ

m別れの挨拶 1 では、また ジャー マタ

f 別れの挨拶 2 ばいばい バイバーイ

m別れの挨拶 3 ばいばい バイバーイ

新生表現(「～されてください」、「○時前△分」)、新方言(「とても」を意味する「シンケン」)の誕生、ネオ方言(「イカンヤッタ」から「イカンカッタ」への変化)などの観点から方言談話を分析し、方言変容の型を解明した。謝辞の「オーキニ」や辞去の意を表す「イノー」は共通語の「アリガトー」や「カエロー」に変わって行くが、一気に或いは一斉に変わるわけではなく、同一人が両形を使ったり、談話の話し手の一人が一方を、もう一人が他方を使ってコミュニケーションが成り立っていることも観察された。話し手によって異なる場合は、男女差であったり年齢差であったりとさまざまである。

談話におけるアスペクト形式と機能の変容についての解明も行った。大分県は全般的に結果相が「チョン」進行相が「ヨン」で現れるが、福岡県と同様の「チョル」や「ヨル」が西部で聞かれる。

文末助詞は、前述の「デー」や「エ」(「アッカエ」有るかね)、「ヨ」(「キオ ツキーヨ」気をつけろよ)が盛んであるが、地域差も見られ、西部の日田市、旧山国町(現中津市)など、福岡県に隣接する地域では「バイ」(「ク

ジ ナールバイ」九時になるよ)「タイ」(「ツズカンタイ」続かないんだ)などの文末助詞が聞かれ、福岡県の筑後方言の影響を受けていることがわかる。高年層にすでにその影響は見られ、年齢が若くなるにつれてますます強くなるようである。

その他挨拶や語彙、文法的特徴の変化などを分析した。

方言談話資料の文字化に関しては、NHKの『全国方言資料』の方法が踏襲され、国立国語研究所の『方言談話資料』『日本のふるさとことば集成』などでも、細かい差異はあるものの同様の記述方法を取っている。しかし、4名で分担して文字化作業を進めると、分かち書き、改行、共通語訳、注記の施し方が個人個人異なり、統一的基準を作る必要が生じた。そこで2010年度中に凡例とともに一応の基準を作製し、3年間に収集した資料を統一的に整理することができたが、不十分なところは残った。

例えば、「ドコ イキヨン」と言う道で会ったときの呼びかけは、直訳すれば「どこに行っているの?」だが、この表現は共通語では、第3者についてどこか離れた場所に行っていて今は談話の現場にいない人のことを尋ねている意味になる。かと言って「どこに行くの?」と訳せば、もとの表現の意味がうまく表せない。そこで、「どこに行きヨルの?」という折衷訳が生じる。「ドコ イクン」(どこに行くの?)と言う表現も可能であるし、また、存在するためにどちらも同じ共通語訳にはできないわけである。

また、注記の書き方においても担当者により異なる傾向も生じた。

例えば、中津市溝辺(旧山国町)の高年層の買い物の場面で高年男性が「ゼニャー モタンキ ツケチョクレナイ」と発話した。共通語訳は「金は持たないからつけておいておくれ」であるが、その注記は次の通り。<「モタンキ」は直訳すれば「持たないから」であるが、この地域では「持っていないから」の意で使われる。共通語では「ている」形になるところを「する」形で表す。>このような注記が必要であるのかどうかについて議論が行われた。

また、同じ場面の「ゼニノネーチャーモンワトゼネーモンジャネーカラ」共通語訳は「お金のないというものはさびしいものだねー」である。「トゼネー」についての注記は次の通り。<「徒然ない」に相当する。東北の青森、秋田と高知、九州の福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島と奄美にも同様の形式と意味で分布する。『徒然草』の「徒然」の音読み「トゼン」に語幹尾「ナ」を付け「トゼンナ」というナ形容詞を作り、さらに語尾「イ」を付けて形容詞化して「トゼンナイ」になったもの。さらに「ナイ」が融合して「ネ

ー」となった。>これは、同一語源を持つ語形が東北と九州に分布しており、古い語形が「周圈的」に分布していること、もともとの「徒然」からどのように音変化して「トゼネー」が生じたかを説明している。この注記自体は問題ないが、他の部分で注記を施していなかったり、簡略なものであったりすると注記の施し方のバランスが問題になる。

当初予定していた12地点に加え、新たな1地点の資料を収集した13地点の音声及び文字化資料はDVDに収録した。

50年前・20年前には談話資料の収録が可能であった数地点は中学校の統廃合や青年層の転出で、対象の人が居なくなり収録不能であった。

また、調査研究を進める過程で話者或いは調査の世話など調査協力者への御礼をどの程度、どのような形でするのがよいか、が議論になった。調査の規模や経費の出どころ、調査内容・方法など様々な要因がかかわり、個々の調査ごとに判断して対処しなければならないことは言うまでもないが、これまで方言調査に携わってきた研究者は必ず解決しなければならない問題であった。また、社会情勢の変化に伴い無償で協力を仰ぐことも難しくなっている。このような点に関して方言研究界に問いかけをしてはどうかと言うところで2011年度は終了している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 杉村孝夫、辞去の場面の談話分析—大分県方言50年の変容—、福岡教育大学紀要、査読無し、61号第一分冊、2012、47-68

② 松田美香、大分県方言の文末詞とイントネーション、地域社会研究、査読無し、21号、2012、6-11

③ 松田美香、大分県中津市の文末詞デ(一)のイントネーション、別府大学紀要、査読無し、第54号、2012、1-13

〔学会発表〕(計5件)

① 杉村孝夫、辞去の場面の談話分析、筑紫日本語研究会第237回研究会、九重研修センター、2011年8月9日

② 松田美香、「そうですか」と「ソーデー」の比較研究、九州方言研究会第32回研究発表会、ニューウエルシティー宮崎、2011年7月2日

③ 日高貢一郎、杉村孝夫、話者への御礼について、九州方言研究会第32回研究発表会、ニューウエルシティー宮崎、2011年7月2日

④ 松田美香、大分県中津市の文末詞デ(一)

のイントネーション、九州方言研究会第 30  
回研究発表会、鹿児島大学法文学部、2010 年  
7 月 3 日

⑤杉村孝夫、日高貢一郎、二階堂整、松田美  
香、大分県方言 50 年の変容、九州方言研究  
会第 29 回研究会、熊本大学くすのき 1 会館、  
2010 年 1 月 10 日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉村 孝夫 (SUGIMURA TAKAO)  
福岡教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：60083234

### (2) 研究分担者

日高 貢一郎 (HIDAKA KOUICHIROU)  
大分大学・教育福祉科学部・教授  
研究者番号：30136767

二階堂 整 (NIKAIDOU HITOSHI)  
福岡女学院大学・人文学部・教授  
研究者番号：60221470

松田 美香 (MATSUDA MIKA)  
別府大学・文学部・准教授  
研究者番号：00300492